田代幹夫著述

臺灣軍記

三上

臺灣軍記三編上

田代幹夫編

偖も熟番生番ともに一部落に一人づゝの酋長ある者ありし事ハ既に前にも記せしが其外に(チラリー)と言ふ地に名を(トキトク)といふ酋長あり此人衆望あるをもて服従する者多かりしが去年六十七歳にて死せり其子代つて酋長となれどもいまだ幼年なるをもつて(サハリー)と言ふ所の酋長(イサ)といへるハ叔父なる

A408
3
48-8063

故に當時これが後見たり偖此(トキトク)(イサ)の二個ハ門閥の家柄にて生熟番の其うちにても二人の支配を受る者多く(イサ)の管轄する所を熟番八庄生番五社あり又(トキトク)の管轄の生番総て六社ありて牡丹。高士滑。なと言ふ族も則ち(トキトク)の配下なり然れとも野蛮の事なれバこれを保護する政事もなく又訴訟を裁断する法律とてもある事なし只他の部落と闘争など

起りたる時に臨み加勢を出して援へるのみ仍て這回の事件なれも(トキトク)(イサ)の両酋長ハ我陣門に降伏せしかども牡丹及び高士滑の土番に利害を説諭して倶に従順なさしむる権柄とてもあらざりしか彼両人種ハ只管に殺伐をのみ好むまゝにて廿二日の敗北にいまだ屈する氣色もなく尚も野心を懐ける故に偖こそ六月一日の大挙の沙汰にハ及びしなるが其程に五月の下浣より連日霖雨降続きしに別て六月

一日には大雨頻りに降りしかど兵士等これを物ともせず三手に分ちし其中なる石門口へ向へる兵は徴集兵二小隊十九大隊一小隊及び海兵五十名大砲の類ひを夫卒に曳せなどせしを佐久間中佐等これを指揮して降伏の酋長等を則ち案内者となしつ午後第一時に本営を発して第五時に至る頃四重溪庄と言ふ所に着せり本営より是迄の行程僅か一里に餘れど途中に四筋の川ありて

常にはさのみ深からねど大雨の為に水漲りて衆兵渉るに悩みしが別て第二の川にいたりては溪間の水落合ひて甚だ急流なる故に一同是を渡るとき十九大隊の卒一人ハ中流にて轉びしが衆これを救ふ事を得ずして遂に溺死に及びしハ最憫むべきことなん斯の如くの勢ひにて第三第四の川を越ゆれば僅の路程に手間どりしかバ四重溪庄に着陣なしけり直ちに斥候を出して其近傍を探索なさしに敵と

覘しき者も見へず仍て各隊に命じて持場々々を
固めさせ且つ哨兵を諸口に出して警備最も厳に
做し當所の民家に宿陣せしが斯の如くに道路
悪くしてハ大砲及び兵粮など運送なすを事能ハざる
故更に本營に使を馳て許多の人夫を呼下し谷
川の南の岸へ新規に道を作らしめ偖次の日の
午前六時に徵集隊を先鋒として綃石門まで進
発せり　此石門と唱ふるハ石を積て土蕃等が胸壁とせし所なり　然るに件の石門ハ

去る廿二日の争戦に大いに敗られしに懲りけん
其近傍の在家にハ住む者とてもあらざれバ尚巣
穴を襲ハんといよく兵を進ましむるに是より
道路ますく嶮しく断岸をよぢ渓水を渉りて
僅かに獣蹄を容るゝばかりの小径を辿り探して
大埔角といへるに到れり這所よりして牡丹社まで
行程一里餘ありと聞けバ先隊の兵士等憤発して
険岨を凌ぎて進む程に既にして牡丹へ半里許りに

及びし所に大木を伐て小徑を塞ぎ輙く進むこと
を得ず然とて猶豫すべくも在らねば各銃劔を
引抜きて伐拂ひ杯するうちにはや日は西に沈み
たれば終に取除くる事を果さず余義なく樹間に
陣を布きて露に濡つて夜を明かせしに彼の徴集
兵の一隊のみ強氣無類の面々なりしが彼の大木を
伐り除きたる些の虚間より潜り抜けて牡丹社
へと進撃せしに土蕃等ハこれに逃出て何れの山へか

躲れけん村中家数十余戸あれども一個も出會ふ
者のあらねば兵士等遺憾に堪ずといへども敵居
合ねバ詮術なく這所に宿陣なせし程に翌三日の
朝に至り彼の大木を伐除けて自餘の兵士等進み
来りしが又本営より西郷都督も此地へ出張せられし
なぞ風港口竹社口より進撃なせる兵士等へ号砲を
示さん為に臼砲を放つ事数十発に及びけるが
尓ハ是迫進を来せる其道險岨のみならず岐路

甚だ多くして不分明なる故により糧食大いに延着せしかバ一同飢に臨みしとぞ偖此牡丹族の群の中にて山腹に棲を為せる者尚若干人あるよしなれバ又徴集兵二分隊二人の案内者を倶して此日第九時同所を発し漸次に山深く進める途中思ひがけなき草叢の中より潜伏なしたる蕃人等が突然として狙撃せしかバ士卒両名痍を負ふたり夫と見るより躬方の面々或ハ駭き且怒りて偖ハ蕃賊出たるぞ

一個も洩さじ撃取れと茂りし草の其裡へ頻りに小銃を放ち掛け或ハ刀を抜きかざし中に分入り獵りしかど土蕃等ハはや何処へか逃去りけん影だも見へねバ尚も峨々たる岩根を傳ひて山また山に進み行けるが果して茲に小村ありて家数三四十軒より是に火を掛け焼拂ひ四辺の樹木の間まで限なく捜し索めしかど土蕃等一個も見へざれバ午後四時過る頃ひに元の陣所へ退き又南方の

溪中なる土番等捷を為すとおもへバ十九大隊一分
隊午前十時ふ出兵して襲撃んとしけるに
是なる土番も逃去りて抗ふ者もなかりしかバ此
人家をも放火せり尓ハまた風港口へハ谷参軍を
大将として徴集兵三小隊十九大隊三小隊去る
六月一日ふ本営を進発なし北ふ向ひて往く程ハ
楓風港ふ到りしかバ其夜ハ同所ふ一泊し次の日
早天ふ徴集兵を先鋒として真先ふ進ましめ

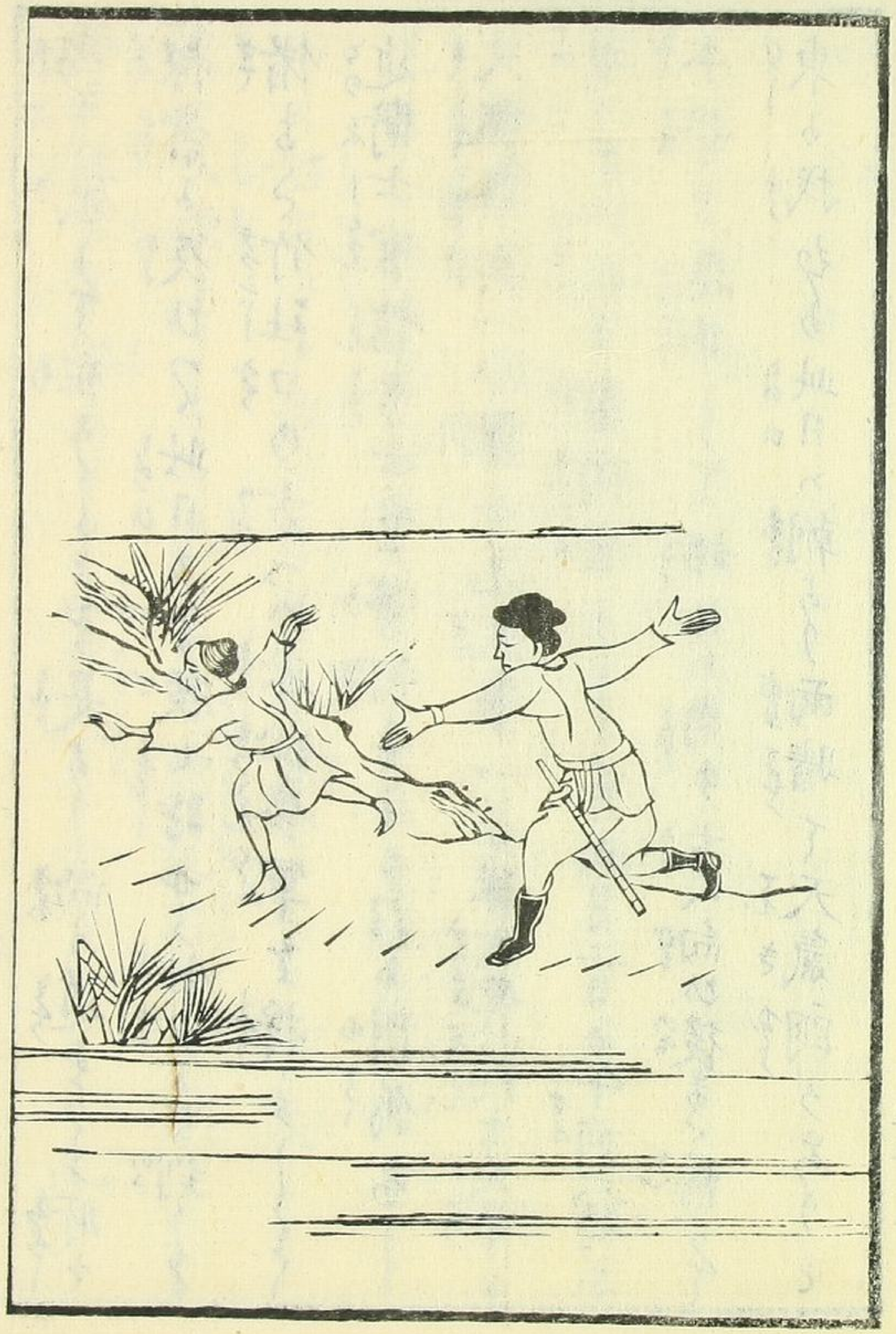
十九大隊三小隊のうち一小隊を残し置て此風港の
守衛となし其餘の兵士二小隊を谷氏親ら
引率せらる土人を案内者となして頻りに兵を
急がせと雖ル此道ハまた険岨ふて溪川七箇所
を渡り越すに其深き事二尺ふ餘り何れも急
流なれバ渡りなやみし左右して路の程二里餘も来ると
思ふ頃向方ふ一ツの大山あり此山の絶頂ふ爾乃
族の分村ありと案内者より報知ぞ徴集兵ハ

些とも猶豫せず稍坂路にかゝりしに是迄来りし道よりも又一層の険路にて或ひハ葛藤に取すがり茅草を押分などして辛く山上に攀登りしに果して山頂に人家四五軒あり然れども何れも逃去りて土蕃一人も在る事なし兵士等険岨を辿りしにて大いに疲労為たりしかバ姑く這所に休足なし薯蕷なんど貯へありしを奪ふて之を食ひけるぞ徳て又山を下り渓谷に出る迄行程殆ど四里なり

急流数箇所を渡り越し又一里餘の険山を越へて少しく下りくる所に人家の建連なりくるあり是則ち爾乃なり仍て兵士等此村落に進み入らんと為るに俄右手に當れる山腹より忽ち小銃を打掛けしかバ先に進みし案内者と小卒一名痍を負ふたり偖ハ蕃賊那所にありと這方も透さず砲発なし直ちに是等の趣きを後陣へ通じたりしかバ谷少将にハ此報を聞き卒かに一小隊に命じて山手の

方へさし廻し敵の後ろを襲はせたり然るに先隊の
徴集兵は頻りに砲を發しつゝ件の村に攻入る程に
蕃族一個を撃斃せしのみ其餘は總て逃失たるを
尚も探索なせしと雖も何地往けん姿も見へざれバ又
少将の命を受て山手に廻りし一小隊も路なき
所を踏分けつゝ後ろを襲ひて土蕃等を挟み打に
做んとせしに敵一人も在らざれバ山を下りて村に
到れバ谷少将にも着陣せり然るに其日も昏に及べバ

諸口に兵を分配し彼の民家に宿陣なし次の日も
また未明より四辺隈なく擸出さんとも出會ふものゝ
あらざるゆゑ軀て人家に火をかけて咸残りなく
焼拂ひ總軍その地を立去りて夫より南の方に向ひ
牡丹の地へと進める途中老少二女を見付たり
老女は既に我兵に行會ひたるに驚きたる慌忙き逃
さりしが少女は、その性愚昧なるにや途中に立て
逃もせざれバ遂に兵士等これを手捕へて本営に送りしかども



官軍牡丹を進撃し先
として一
少女を獲る

尚平氣にて在りしとぞ是より尚ほ道すがら町々
探索に及びて此日の午後七時頃牡丹などへ到りける
備へて竹社口の方へハ赤松参軍を將として
近衛士官信号士官等何れもこれに附属なし
又徴集兵一小隊十九大隊一小隊大砲一門を夫卒に
曳せ土人を案内者となして六月二日の午前六時に
本營を進発して始めハ南の方へ向ひ後また轉じて
東に找むるに此日ハ朝より雨晴て天氣朗かなりしと

雖も霧雨續きし後なれバ路ハ宛然深田のごとく
ぬかるみ泥に脚を埋め又溪水ハ漲り溢れて
股にまでおよぶなれバ總軍大いに行惱みて辛く谷間の
小徑を辿り彼の石門の坂上に到りて東の方を望み
見れバ一座の高峰屹立するあり其他連山波濤の
如く右左りに竝び立草木彌がうへに生茂りて
更に人煙ありとも見へず其時案内者を呼びて
路の便宜を諮ねるに其者答て言ふるやう左邊の

山に倚る者ハ是則ち竹社にて右傍の山を隔たる者ハ荊林挌の一部落なり然して高士猾の巣窟ハ東山のまた東に在りと四方を指し示せしぞ是に於て衆を麾き一同件の坂を下れバ是より地形廣くして路も随つて平かなり斯る折から熟蕃數人器具を携へ雞豚を荷擔ひ通りかゝるに出會ひ或ハ言ふ這奴等ハ王師の進撃する時に乘じ彼生蕃等が逃去りし人なき家に赴き

盗みを為せし者なれバ捕へて鞠問すべしといふ或ハまたさにあらじぞ彼の竹社の土蕃等が王師の到るに恐怖してかの山に躲れしに此熟蕃等ハ竹社族と豫て親しき者なる故渠等が器物を運べるのミ賊心ありての事ならじぞと為に言解く者ありしかバ見棄て通りしかりと言ふ斯て往く事幾許もなく流水に臨みし小家あり或ハ保力庄の支庄なりといふ又ハ竹社の分社なりとも其言ふ所安定ならねど

家々に住む者ありとも見へず是より又進む事数町
にして岐路あり是を左りに往く時は直ちに高士
猾に至るべく右に進めば竹社を経て然して後に
高士猾に終には赴く道ありと案内者より申し
出しも其言ふ所曖昧なり時に砲声遥かに聞へ両
雲に轟くなりけるにぞ是石門にて戦ひの必ず
発りしなるべしと直ちに篠崎某は先隊の散集兵を
指揮して右なる渓路に進み入りて続いて福島

参謀にも中軍を率へつゝおなじ道へと往く程に
固より嶮岨の道なるに土蕃等樹木を伐倒して
通路を塞ぎて遮りたり然れども兵士等猶豫せず
或ハこれを躍り越へ又匍匐ふて潜り抜け我後
れじと進み行けば山ハいよいよ嶮にして水はますます
激流を仍て危岩の角に取付き又ハ怪石を飛
渡りてかけ声を掛合ひつ頻りに進み行く
程に変て路の盡るが如く往方に三重の飛瀑

落て断岸壁を為しゐるに齊し其時中軍にある所の福島參謀言つるやう既に先手の徴集兵ハ此絶壁を攀ぢ登り遠く進みしものと見ゆれバ後陣ハ後れて續くとも我が隊是迄進みながら爭ひ遅々たる事あらん此旨後陣へ達しおくべく更に道なき路をもとめ彼の断岸に登る事凡百尺許りにして僅かなる平地あり夫より西北の方を望めバ大澤を一ツ隔て向ふの山の絶頂に登るべきの一路あり且つ土蕃等が設けたる塁ある躰に見ゆるにぞ這所にて少しく息を憩め尚進まんとする程に此日ハ雨の晴たる故炎熱殊に甚だしく寒暖計稍九十度を過ぎんとする程なるに斯る嶮路を経し事なへ軍中大いに疲労して疾みて斃るゝ者さへあれバ醫官及び部伍を留て是等の者を看護なさしめ躬て福島參謀にハ強兵のみを引倶して彼の大澤に分入れバ林莽四方に生茂く

白昼宛然暗夜の如く変りても又路絶えざれど先手の
進みし跡を踏んで遂に峰に攀登り最も高き
所に到りて遥かに西を回顧せば車城なる本営を
忽ち眼下に見るに及べり仍て思ふに此山ハ曩に
石門の坂上より東に見へし高嶺なるを其処へハ
登り着きたるなりけり然れども塁と見へしなる我を
防ぐの敵もあらねば北に向ひて嶺を下り行くと
一里許りにして忽ち右の方にあたり砲声頻りに

聞ゆるにぞ前軍既に戦ひを交へたるにてありぬべし
急ぎこれを援けんと山腹の小径をば馳せ向ふ事
数町にして砲声漸次に疎くなりしに既にして
土蕃等が一巣窟に到りたり仍て兵士を手配して
稍探索に及べども賊等ハ逃て姿も見へず四辺に
薯蕷粟の類ひを少しく作りありしを見つけ何れも
飢に臨みし由へ是等を取りて食ふ程に忽然として
東の山に火を放ちしと思しくて烟り熾んに立昇るに

先手の兵士等陸續と山へ登るの形勢なれバ此隊も
劣らず進むべしと衆を激まし打立んと然バまづ
赤松少将ハ後軍の兵を引倡して少し後れて
進發せしが既に福嶋参謀より道路甚だ嶮なりとも
先手に續きて進むの赴き使をもつて報知為されバ
大砲及び兵粮なんど難路を通行なしがたきハ咸
間道より廻らしめ兵隊のミを率へて彼の中軍に
引続きて嶮岨を厭ハず進ましめしかバ山手に煙りの

立登る頃稍中軍に追着しかバ是より両軍相続いて
又幾町か進む程に這所に土番の小村ありて
賊徒ハ逃て居らざれど豚五七頭買ひおきたり
兵士等何れも飢労れしかバかの家中に立入て
頻りに食を求むるにぞ一甕の塩肉とまた一壺の
粟酒を得たり衆ミなともに争ひ食ひなしたる
折から砲声再び東の方なる山上に響きて前軍
旗を打掉りて只管中軍を招くの躰あり仍て

少将中軍に令して前なる溪を渡らしめて向ひの
山へと進ませられ其時前軍に加はれる海軍の大尉
吉田某が遽し氣に後陣に来りて赤松少将に
對ひて言ふやう既にして前軍ハ指揮長篠崎真
先に進ミ一小隊を引倶せしが俺們か又兵士を激まし
險岨を越へて往程に爰より先に一條の川あり
先手等とこれを涉らんとするに忽ちに敵二人あり
来りて窺ふ躰なるを我兵疾くとこれを見付て

撃て取らんと為られしにいまだ砲発せざる間に
渠逸疾くも身を轉へして山手の方へ逃走りしに
遂に姿を見失ひぬれば遺憾最も尠からねバ諸方へ
斥候の兵を出して普く行衛を探索せしに渠等
路傍の草叢の最も深く茂りし中に身を潜ませつゝ
躲を居て斥候の進ミ行くを待受け稍二三間に
近づく所を狙ひすまして突然と砲撃せしかバ
事なきが二個の斥候ハ撃殺され一人ハ又傷付り

爰に至りて篠原氏には怒り心頭に発して諸手の兵に下知を傳へて彼の草叢を獵らせしかども逃失せて影もなし篠原いよいよ焦燥く稍山上まで登り詰め遂に賊窟あるに逼りてこれに火を掛け焼立れど敵一人も出會ねば篠原尚憤りに堪ず今より一分隊をもて夜を冒すとも土番等を捜し出して斬盡さんと頻りに憤るを卑職が百方是を止むれどもなかなかに聽入れねば因て長官の命を奉じ

然して後に進まんと約してこゝまで来れるなり君宜しく熟考なせと言ふに赤松も按していまだ返答に及ばざるうち福島参謀来りて言ふやう敵烏合とは言ひながら深く草莽の裡に匿れ其形跡を見せずして我兵士等を狙撃なす狡猾斯の如くなるを別に策をも施さず猥りに進んで我が兵を渠が餌となさんはなにもあしぞ殊さら日もくれ西に沈めば今宵は要害の地に宿陣なし天明く

土蕃の潜居の地を挟撃なし給ふべしと談判に及べる所へ篠原大いに急立来りて直ちに進撃なさんとの旨最も盛んに演説せり其とき赤松少将には手を拱きて所居たりしが諸彦の主意何れも理あれども抑此地の景況を見るに群峯四方に連りて渓水所々に漲へ流る日晩て大軍を進ましめん事労して功なきのみならず返つて不利を生ぜんか我兵今朝より険岨を越へて

飢疲れざる者もなきに糧食後れていまだ来らず且つ弾薬も供せざれば福島氏の意見に就て便宜の場所に宿陣なし天明て渠を襲ふとも奚ぞ遅しと言ふべからん是万全の策なりと利害を説て辨論なせしにぞかのく是に同意して軈て総軍を引纏め夫より渓に下り立て這所に土蕃が捨逃たる家三室など在りけるを本陣として其以下は所々に野陣を布設け且つ番兵を諸方に置きて敵の

襲ハん防ぎとし其夜を玆に明さんとせしに徴集
兵の後殿せし者歸り来りて報ずるやう只今
向ひの山を見るに賊兵許多西方へ向ふて到る氣
色あり恐くハ我が陣に夜撃を為んと企る物なるべし
あるべけれバ豫備あらずんバ悔ひかるべしと言ふに残
折听く篠原が備ハ敵あるも准備あり仮令諸方に
番兵を置くとも要害悪き谷間に宿しぬ敵に
夜撃を掛られなバ我軍必ず騒擾して死傷の者も

多からん寧今より奮発して敵の根據とせる所の
彼石門を襲撃せんと言ふに福島吉田等も
遂に篠原が意に同じく議論再び沸騰なしけるぞ
赤松苦慮せしと雖も勢ひ止まり叵かりければ
薄暮卒かに進撃の令を陣中に布かしむる畢竟
全軍夜に乘じて敵を襲ハんとするに至り又甚麼なる
譚りかある开ハ次の巻に綴るを看るべし

臺灣軍記三編上

春園暢浄書

三上／二十

010190518936